

「国際共通語」の基本問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 義明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8782

「国際共通語」の基本問題

水野義明

I はじめに

「国際共通語」、「国際共通語論」というのは、‘interlanguage’、‘interlinguistics’の試訳である。Webster’s New International Dictionary（第三版）には、次のように定義してある。

interlanguage language or a language for international communication,
interlinguistics the study of interlingual similarities and relationships
esp. for the purpose of devising an interlanguage.

しかし、そういう「国際共通語」として現在のところ一般に承認されている言語があるわけではない。したがって「国際共通語論」というのも、何か特定の対象についての研究というよりも、それに向かった研究という性格が強い。その目標は、いうまでもなく、合理的な「国際共通語」の創造である。

国際共通語は、一見われわれの生活とは縁遠いように思われるが、よく考えてみると大変重要で、また或る意味では緊急の問題であることがわかる。その理由は、現代の世界の多言語状態にある。政治、経済、文化などの各分野で国際交流が今日ほど頻繁な時代はない。しかし、一方では、戦後の植民地体制の崩壊と共に、ナショナリズムが勃興し、新興の各国が固有の国語を擁立するようになったので、国際間の多言語状態はいよいよ深刻になった。相互理解の媒

体となる言語の役割が重要となり、言語問題は、インドのような多言語国家の国内問題としてのみならず、国際間の相互理解のためにも、早急に解決を必要としている。

その解決のためのひとつの便法として、国連や国際会議では、「公用言語」を定めているが、「公用言語」として採用されない言語を用いている人々にとっては、これは言語的差別を受けているのと同じである。しかし「公用言語」の数をあまり増やすと、今度は翻訳事務などが煩雑となって実益が乏しくなる。まれには、多くの言語に熟達している人々もいるが、言語の研究を専門としない者にとっては、そういうことは到底望めない。それで結局、せいぜいひとつか、ふたつの外国語を学習して少しでも埋め合わせをしようとするのだが、こちらが英語やフランス語を習っても、英米人やフランス人が日本語を勉強してくれるとは限らない。いずれにしても、多言語状態は、現実には言語的不平等を意味する。梅棹忠夫の表現を借りれば、「言語的帝国主義」である。中立的な国際共通語への要望が高まるのは当然であろう。

国際共通語というと、まず頭に浮かぶのはエスペラントである。また実際エスペラントの普及の程度や実用性は、この種の言語としては最も高い。しかしエスペラントは、今のところ唯一の国際共通語とは言えない。その公表された前後にも多数の国際共通語の草案が発表されている。国際共通語論の立場から言えば、エスペラントも *a language for international communication* に過ぎない。

私の考えでは、国際共通語論には、次の三つの根本問題がある。それは、

1. 「国際共通語」は、果して成立が可能かどうか、
2. もし可能であるとすれば、その機能は、「国際補助語」か、それとも「単一の世界語」か、
3. 「国際共通語」には、どのような言語が適当か、
というものである。

この小論では、これらの点について若干の考察を試みた。論述の便宜上、近年刊行された、E. P. スヴァドストの「共通語はどのようにして生まれるか」(1968年、モスクワ)の論旨を紹介、検討するという形をとっている。国際共通語論についてまとまった研究は数少なく、特にソ連の事情についてはわが国ではあまり知られていない。この小論が、「国際共通語」という現代の課題に注意を喚起する契機となれば、さいわいである。

Ⅱ 国際共通語は実現可能か

E. P. スヴァドストは、国際共通語が「現代の緊急課題」だと述べ、「この問題は、もはや理論的検討の時期から実践の時期に入った」としている。彼の論点については、この小論の冒頭にも触れた、現在の世界的多言語状態を考えれば、一般的には首肯できる。深刻な言語の分裂状況は、国際交流と相互理解とを著るしく阻害していることは疑いがない。同時通訳や機械翻訳の技術の発達は、この困難を部分的に緩和するかも知れないが、共通の言語を媒体とする場合に比べれば、その効果はきわめて少ない。数学で用いられる数字や記号、化学記号などのように国際間に或種の共通コードが普及すれば、必要な情報を交換することも、不可能ではない。しかし、われわれは、数字や化学記号で思想や感情までも表現することは、暗号として使われている場合を除けば、不可能である。

また暗号の場合は、既存の言語を背景としているので、純粹にコードによる伝達とは言えない。要するに多言語状態の解決には、単一言語状態または少数言語状態のみしかない。

このことは、国際共通語論の立場から言えば、全人類が唯一の言語を用いるようになるか、それとも各民族が固有の民族語のほかに国際補助語を利用するかということになる。

しかし、果してそういうことが具体的に実現するであろうかという点になると、否定的、懐疑的態度をとる人々が多い。

スヴァドストは、これに対して、最初から確信をもって肯定している。「共

通語はどのようにして生まれるか」という彼の著書の題名が示すように、彼にとって問題は、もはや方法論 how to にすぎない。その理由としては、次の事柄が挙げられるであろう。

1. 共通語に対する人々の要望が高まっていること。たとえばスヴァドストが1957年モスクワの第四回世界青年祭で各国の代表にアンケートを行なった結果、国際語の必要については回答者の全部が肯定しているとのことである。

2. 共通語の歴史が長いこと。あらゆる民族が同じ言葉で語るようになるのは、人類の長い間の夢であった。古くは旧約聖書やプラトーンの著作の中にも、それについて述べられているし、中世、近代に入ってから、共通語への関心はますます高まり、現在までに公表された国際共通語の草案は約 650 種にも達するということである。(坂井松太郎等編「エスペラント便覧」) スヴァドストは、豊富な資料を駆使して共通語の歴史を概括しているが、それによれば、自然言語の簡略化、自然言語に基く人工語、諸概念の哲学的分類に基く人工語などさまざまな試みがすでになされていて、それらの実績の上に立てば、合理的な共通語が成立するのは、充分見込みのあることとされる。

3. 単一の人類社会が必然的に成立すること。スヴァドストは「マルクス・レーニン主義の立場」から共通語問題を論じている。したがって彼の一般的な世界観は史的唯物論による社会発展説であり、資本主義は、おそかれ早かれ社会主義に移行し、全人類の規模での社会主義社会、更には共産主義社会の到来は不可避であるとしている。この見解は、現在のところ必ずしも客観的に妥当するとは言えず、その当否は将来の歴史の歩みが決定する問題である。また、仮りに単一の人類社会の出現が必然的なものであるとしても、その社会が、果してスヴァドストの考えているような、唯物史観の示唆する「階級の無い社会」であるかどうかは、異論の余地もあろう。いずれにせよ、スヴァドストの言うような意味での「単一の人類社会」は、国際共通語論にとっては、ひとつの作業仮説の意義しか持たず、共通語成立の一般的前提とすることはできないと思う。

ただひとつ言えることは、非常に遠い未来のことはさておいて、或程度予見

の可能な将来については、国際間の交流があらゆる分野で一層活潑となり、資本主義と社会主義とを問わず一般に地球上の人々の生活様式や生活水準の相違は次第に少なくなり、少くとも国際共通語を直接必要とする階層の人々の間では等質的な生活環境や文化的雰囲気形成される可能性もあるということである。共通語がさしあたって必要且つ有効となるのは、この分野においてである。スヴァドストのように、全世界的社会主義体制の成立を共通語の根本条件とするのは、一面的な見解であると言わざるを得ない。

ともあれ、スヴァドストは共通語成立の可能性を確信しているのであるが、彼の思想を通じて目立った傾向は、その楽天主義である。彼の論旨は、要するに、国際共通語は「緊急の課題」であるから、人類はこの問題に真剣に取り組むようになり、科学的研究と集団的検討を経て、合理的な共通語は必ず成立するであろうということである。

私自身は、スヴァドストとは見解が相違する点もあるが、やはり国際共通語という問題は、もっと多くの人々の注意に値するものと考ええる。そしてその成立の可能性は、最初に指摘したように、「認識」の問題というよりも、「実践」の問題だと思う。それが具体的にはどういう形をとるにしても、「多言語状態」に由る国際交流の障壁は、われわれの手で取り除かれねばならず、また取り除かれるであろう。共通語成立の可能性の論証は、国際共通語論の主要な課題とはならないと思う。

Ⅲ 「補助語」か「単一語」か

国際共通語は本来国際間の意志疎通のための補助的手段であるべきか、それとも遠い将来は全人類の単一の言語となることを意図すべきかは、未だ確定していない問題である。たとえば、現在のエスペラント運動の内部にも、大きく分けて、補助語としての側面に重点を置く UEA (Universala Esperanto-Asocio 世界(万国)エスペラント協会)の流れと、世界語(人類の単一語)としてのエスペラントを推進しようとする SAT (Sennacieca Asocio Tutmonda 全世

界無民族性協会)の流れとが並存している。(坂井等篇, 前掲書)

補助語としての立場を支持する人々は、西欧、米国に多く、デンマークの言語学者オットー・イエスペルセンなどはその代表である。

イエスペルセンは、最初はエスペラント、イドなどの国際共通語運動に関心を抱いたが、後には“Novial”という独自の国際語案を発表した。彼は、自分の草案を、“an artificial international auxiliary language”(人工国際補助言語)と呼んでいる。この言語は、人類の単一語(To one human race, one language)を意図しているのではなく、第二の言語としての補助語(The second language to everybody)としての考案されたものであるという。「補助語」についての彼の見解は次の通りである。

「(auxiliary という語の説明として)これは、この国際語が、国語が交流手段として役立たない時はいつでも、国語の代用となることを意図しているにすぎないという意味である。

ひとつの新しい言語が現存の諸言語に取ってかわるというつもりではない。諸国民が自分の言語を忘れて、唯一の代用言語を万事につけ使用することに同意できるとは、まじめに考える人なら誰も思わないであろう。……新しい国際語は、母国語の神聖な権利を侵害するものではなく、互いに相手の言語を知らない人々が話し合ったり、手紙を書くときにのみ、用いられるのである。」

(*An International Language*, 1928)

エスペラント運動の初期には、エスペラントは専ら補助語と考えられていた。たとえば1905年フランスのブーロニュ・シュル・メールで開かれた第一回万国エスペラント大会の宣言には、次のように述べられている。

「エスペラント運動とは、中立的な人間のことばを全世界に普及する努力のことである。

中立語は諸国民の国内生活に干渉することなく、また現存する諸国語を押し除けることを少しも目的としない。それは異なった民族の人びとに、互いに意志を通じあう可能性をあたえる。またそれは、いろんな民族が言語上の争いをしている諸国では、公共機関の調停的言語として役にたち、さらに、いずれの

国民にとっても、同等に興味のある作品が発表できるような言語である。」(梅棹忠夫・藤本達生訳による)

これに対して、スヴァドストは「国際補助語」という思想は「ブルジョア・イデオロギー」であるとして斥けている。彼は言う。(前掲書 p. 121)

「諸民族間の補助的(ただそれだけの!)言語というのが、共通語についてのブルジョア理論の基本命題である。この命題は、階級の存在と、したがって人類が国家に分裂している状態を支持するブルジョアジーの存在とが不動であるという確信に基いている。また人類が国家に分裂していることは、人類が諸民族に分裂していることの支えとなっている。

これは典型的にブルジョアのイデオロギー、ブルジョア的世界観であって、マルクス・レーニン主義の思想とは決して相容れないものである。(マルクス・レーニン主義の思想とは)プロレタリアートの全世界的・歴史的役割についての思想であり、階級もなく、国家もなく、最後には民族もなくなるような普遍的社会についての思想であり、その社会では人間による人間の支配が人間による物の支配に換えられ、資本家から解放されて物質的、精神的財貨の生産が全勤労者の必要の充足にあてられるであろう。」

この論文の第二節で言及したように、スヴァドストの世界観によれば、将来全世界的規模で社会主義が成立し、国家も民族さえも消滅するというのである。したがって彼が、現存の階級社会や国境、諸民族による区分には手を触れずに、つまり国際社会の現状を一応固定した上で、諸国民間の交流の手段としての共通語を考える「補助語論」には、同意できないのは当然である。彼は、基本的には、世界革命と共通語とを不可分と考えている。

この基本的立場には、すべての共通語論者が必ずしも賛意を示しているわけではない。私自身は、言語は「上部構造」でも「下部構造」でもなく、「社会の全成員のために作られた」(スターリン、「マルクス主義と言語学の諸問題」)という特殊な性格をもっているので、共通語問題についても社会構造や社会変革など政治的、経済的要因を除外して考える余地が充分存在すると思う。

スヴァドストの「補助語論」反対の中で重要なのは、むしろ具体的な側面か

らの指摘である。彼は次のように述べている。

「(補助語は先ず第一に、学者、商人、工場主、外交官、宣教師、旅行者とそのガイド、国際通信業務の従業員などにとって必要であるという見解に従えば) 国際補助語は、民衆に必要ではなく、主としてブルジョアジーとその国際的取引に必要なのである。」(E. P. スヴァドスト、前掲書、p. 15)

スヴァドストによれば、従来の国際補助語論は、結局一部の人々の利益に仕えるだけで、新しい人類の言語としての構想を欠いているのである。また、大部分の補助語草案が、実際には西欧中心的性格のものであることを挙げて、次のように言っている。

「エスペラントも、それから派生した種々の言語も、語彙や基本的任務についてみれば、西欧中心 *occidentalism* である。…… 普遍的共通語が西の諸民族のためだけでなく、東の諸民族、言うなれば世界の全民族のためにも同様に必要であるということ考えたのは、たとえば米国の進歩的言語学者エドワード・サピアなどを除いては、ブルジョア国際語論者の中ではごく稀れである。」(E. P. スヴァドスト、前掲書、p. 15)

従来の有力な共通語草案が、文字、発音、語彙、文法構造を通じて概して西欧的であるのは、事実である。坂井等編前掲書の「国際語年表」によれば圧倒的多数の草案が欧米人によって作られているのも、この一因であろう。しかし、インド・ヨーロッパ語族に属する諸言語の範疇が、もっとも合理的で、普遍的な人類思考のパターンであるという結論を下すことはできない。「人類の諸言語を通じて『普遍的』なもの何か」(language universals) について、現代言語学はまさに探究中なのである。とすれば、西欧的性格の強い共通語を人類の単一語(世界語)として用いることは、さしあたっては不合理であると言わざるを得ない。

しかし、「補助語」ということになれば、問題は別である。まず第一に、補助語の利用範囲は限定されていて、各人の自国語による生活の領域までも侵害するわけではない。次に、たとえ「西欧的性格」が強くても、補助語はやはり独立した一言語であるから、これを習得するためには欧米系の人々でも相当の

努力が必要であり、非欧米系の人々にとって不利になる事情はかなり緩和される。第三に、たとえ全人類的な普遍性はもたなくとも、現存諸言語の中ではひとつの代表的存在である西欧語の構造に接することは、非欧米人の言語意識と、したがって思考とを豊かにする。第四には、主として各専門分野のいわゆる国際的語彙 international terms にはすでに語源を離れて普遍的用語となっているものが多いから、これを補助語にできるだけとり入れる可能性も考えられる。

以上のような事情から、私は、共通語が補助語としてとどまる限りでは、充分実用に耐え、著しい支障は生じないと思う。それでは、一方、共通語が「人類の単一言語」になるべきであるという立場については、どうであろうか。

「単一語論」は、現在の資本主義体制に批判的な立場をとる人々の間に多く見られるようである。エスペラント運動の中でも、前述の SAT は無政府主義的傾向が強いといわれる。ソ連では、「単一の人類に、単一の言語を」という思想の理論的確立者は、N. Y. マールであった。マールは、祖語から諸言語が分化するという西欧比較言語学の考え方に対して、諸言語が互に接触して、その相互作用を及ぼす過程で、次第に単一の言語が形成されると主張した。そしてこの考えが、彼の基本的立場である言語社会現象説（言語の発展は社会の発展と並行する）を背景としたときに、上述の「単一語論」に到るのである。

スターリンは、マール言語学を批判しながらも、この点についてはほぼ同様の見解を示した。彼によれば、社会主義の全世界的勝利の後には、各民族語から地域的共通語が生じ、更に各地域的共通語から「単一の、共通的国际語」が形成されるのである。（スターリン、前掲書）また、ソ連言語学界の長老のひとりである A. S. チコーバヴァも、単一語の成立は可能であるとして、「マルクス主義者は、民族語の衰滅の過程と単一の共通世界語の形成とは、この過程を『促進する』ための『人為的手段』に訴えなくとも、漸進的に起るであろうと、理解している。」と述べた。（A. S. チコーバヴァ「ソビエト言語学の若干の問題について」《プラウダ》1950年5月9日）

しかし、以上のような考え方は、厳密に言えば、単一語の**成立可能性**について触れているに過ぎず、その具体的な検討を閑却したものである。単一の共通語は、実際にはどのような性格をもち、またどのようにして人類の言語として確立するののかについては、殆ど述べられていない。その大きな理由としては、共通語が常に未来の「社会主義世界」の問題としてとらえられ、したがって社会主義が勝利をおさめれば、「単一の人類社会」の言語は、**ひとりで**に形成されるだろうという楽観論が支配的であったためと思う。しかし、それでは、共通語は独自の問題となり得る筈はない。ソ連の内部からも「ソ連の国際語研究は20年ほどおこなっている」という声が出るのも当然である。

スヴァドストの見解も、基本的には以上と同じ「単一語論」である。しかし彼は、その単一語が成立する過程について独自のパターンを提唱し、また「社会主義の勝利」という *deus ex machina* に頼って共通語の「自然発生論」に陥ることなく、共通語形成の過程に適切なコントロールを加える必要を主張したという点で、ソ連の共通語研究を一步前進させたのである。

彼はまず、補助語と単一語とは別問題ではないと述べる。「単一語論」の立場から見れば、共通語はその誕生の瞬間から、すでに本質的に単一語である。しかし、それは、一挙に全人類の唯一の言語になるわけではなく、その初期の段階では、諸民族語と並存し、しだいに普及して遂には唯一の言語に到るのである。この初期の段階での共通語は、いわば「補助語」としての役割を果たす。しかしそれは、「補助語論者」の考える「補助語」のようにその段階にとどまるのではなく、普遍的言語に成長する可能性を含んだものである。この意味で、「補助語」が「単一語」の一部とされるのは、当然である。

スヴァドストによれば、共通語が普遍的言語になる過程には三段階がある。それは、
補助共通語 (auxiliary common language) → 基本共通語 (basic common language) → 単一共通語 (unique common language) である。

この三者について、彼は次のように説明している。

「補助語は外国語として学習され、国際的交流において時折り利用されるのみである。一方、基本共通語は、一般に二言語状態を前提とする。

それは、新しい社会の各成員の二つの（少くとも二つの）母語のひとつとなるはずであり、その際最初は第二母語となるが、後には（遠からず）第一母語となる。単一共通語はすべての人々のための、唯一の母語である。……」（E. P. スヴァドスト、前掲書、p. 147）

この説明の中で、「基本共通語」を中間段階として設定したことが、スヴァドストの理論の特色である。彼によれば、ソ連の言語学者は、単一語成立の前に、二言語状態（基本共通語と民族語）が存在することを考えなかった。そのため、「言語の基本構造は変化し難く、民族語が存続する」ことを認める一方では、「社会主義の勝利と共に諸民族語の中から単一語が形成される」という理論的矛盾を犯したのである。

スヴァドストは、次に、共通語の成立には意識的、科学的創造が必要であると主張する。彼は、一定の時期が経過すれば、諸言語はひとりでに融合して共通語を生ずるという考えを「もっとも愚劣な思想」として否定し、次のように述べている。「完全な言語は、先進的な言語学の助けによってのみ、意識的、組織的な言語創造活動によってのみ、達成されるのであり、波止場なまり（ピジョン・イングリッシュなど）が生じたような過程からは決して達成されない。」

（E. P. スヴァドスト、前掲書、p. 206）

一般に、言語への人為的干渉は好ましくないものとされ、現代言語学の課題は言語現象の忠実な記述と法則設定であるとされている。しかし、一方では言語に何らかの規範を求める傾向は根強く、言語政策のもつ意義を否定することはできない。自然的に形成される民族語についてもそうであるから、「未来の単一の人類社会」のための合理的な言語については、その草案の作成から、実際に「単一共通語」に到る過程を通して、人為的規制を加えるのは、むしろ当然であるというのが、スヴァドストの考えである。

もしわれわれが、共通語について「単一語論」の立場をとるならば、具体的過程では「基本語」の段階を設定し、人為的規制を加えることは、妥当であると思われる。しかし、それならば、その「基本語」に相当する言語が、なぜ、前述の SAT (エスペラント世界語論者) のようにエスペラントであったり、またはスターリンやチコヴァバの考える「地域語」(世界語への中間段階) であってはならないのであろうか。これらの言語が普及または形成されれば、事实上はスヴァドストの言う「基本語」に等しい役割を演ずるのではなからうか。

ここで問題となるのは、どのような言語を共通語とすべきかということである。そしてスヴァドストの共通語論の最大の特徴も、この点に存在すると思う。

IV どんな言語を共通語にすべきか

スヴァドストの提案している共通語は結局「人工言語」の一種ということになるが、広く共通語成立の可能な場合を考えると、次の四つの途があると思う。

1. 現存の民族言語のうちどれかひとつが優位を占めて共通語となる。
2. 現存の民族言語が自然的に「融合」して共通語が形成される。
3. 現存の人工的共通語草案のひとつが普及して、共通語としての機能を果たすようになる。
4. 新しく人工的共通語案を作成し、これを実用に供する。

スヴァドストの提案は、このうち4. にあたるものである。彼は他の可能性は、いずれも問題があるとして否定している。

1. については、民族語はすべて自然発生的に形成、発展したものであるから本来不規則、例外事項が多く、それを母国語としない者にとっては、習得はきわめて困難である。「最も国際的」言語といわれる英語ですらも、その発音と綴り字のはなはだしい不一致や、屈折の単純なことの一方では、単調、曖昧という欠点を有することは、しばしば指摘されている。なるほど英語は、長い歴史と、すぐれた文学とをもち、科学技術や国際経済の分野で重要な言語となっ

ている。しかしそれは「偉大な言語ではあるが、普遍的言語ではない」のである。

他方、この英語を簡略化しようとする試みもある。「ベーシック・イングリッシュ」はそのひとつである。この言語の特色は、語彙を最少限にとどめ、あとはパラフレーズの方法によって事物を表現しようことにある。「850語によって 20,000 語の機能を果す」といわれる。しかし語彙の簡略化の反面では、冗長と曖昧という欠陥が生ずる。people という単語がないので、men and women と言わねばならず、hen は domestic bird of the female sex ということになる。またベーシック・イングリッシュは、それ自身が完成された共通語ではなく、「正常な英語への一段階」とされている点も問題である。

英語は、言語自体としても共通語になるには程遠いのであるが、更に重要なのは、それが本来英米人の言語であって、国際的中立性に欠けているという点である。実際問題として、政治、経済、文化などの分野での国際間のバランス・オブ・パワーを考えれば、有力な国の言語が広く普及するのは当然の勢いかも知れないが、それは、どこまでも、惰性的な便法であって、共通語問題の合理的解決とはならない。真の共通語は、諸言語の平等という原則に基かねばならず、「言語的帝国主義」を助成するものであってはならないと思う。

ところで、「共通語」が一般的に承認されていない現在、現実問題としては国際交流は「国際性」の高い言語に依らざるを得ないではないかという意見も出るであろう。私としても、未来の「共通語」に固執して、現在の意志交流の可能性を放棄するつもりはない。私の海外生活の経験ではやはり英語がいちばん効用がある。また国際的会議や行事を見ても、英語は、アジア・アフリカ諸国の共通語のような観を呈しているのは事実である。しかし、第一にこの事情は共通語理論の妥当な帰結ではなく、さしあたっての「便法」であり、第二に、このような英語の役割は、せいぜい国際交流の「補助語」としての性格にとどまるもので、英語の言語としての性格を考えれば、到底真の共通語に発展する見込みはないと言わざるを得ない。

ここで、共通語論にも多少関係があると思うので、「補助語」としての英語に

関する興味ある考え方について、ついでに触れておきたい。それは、小田 実の「イングラント」という思想である。(「図書」1970年11月号) これは、英語が現在すでに「国際語」となっている点を重視し、これを単に「英米人の言語」とせず、世界中の人々の、国際交流のための手段として利用すれば良いという考えである。

「イングラント」というのは「イングリッシュ」と「エスペラント」とを合成した言葉であって、国際英語という面を強調したものである。したがって「イングラント」は、「イングリッシュ」と異なり、比較的簡単な構文を必要最低限(「だいたい50から60」)用いるだけで、あとは適切な語彙をそれにあてはめて、高度の議論にまで役立てようとするものである。ベーシック・イングリッシュとは異なり、パラフレーズ方式はとらない。ここでは、「英米人の英語」をひたすら模範として、おうむ返しの学習に終始するよりも、思考と表現の手段としての「無国籍的」(「人工普遍語」としての)英語に重点が置かれ、何よりも話手自身の創造的活動が中心となっている。

語学教育の目的が、現地人の言語水準に到達することであるとすれば、それは殆ど不可能に近い。その目的を達成するためには、それにふさわしい制度と環境と設備が必要である。(これについては、明治大学教養論集第60号の私の論文「外国語教育について」を参照されたい。) それにしては現在のわが国では、外国語教育の条件は劣悪である。語学教育の現実的目標のひとつとして「イングラント」というアイデアは、注目に価すると思う。

次に、「諸言語の融合」という考えについてはどうであろうか。これについては、前節で単一語形成の可能性について論じたときにも、概略説明したところである。スヴァドストの見解は、現存言語の自然発生的な融合に対して否定的である。たとえば、現在のヨーロッパ諸言語の間には、ギリシア、ラテン語起源の共通語根が7,000ほどあるといわれるが、「ヨーロッパ共通語」は未だ生じていないと言う。融合にあたっては、共通の語彙のみならず、共通の文法、音韻体系までも作り出さねばならないが、たとえば、きわめて近い関係に

あるロシア語、ウクライナ語、白ロシア語の間でも、「融合」は困難である。「『平等の諸言語が互いに裨益し合い融合し合う』という命題は、……諸言語発展の歴史的経験や、……言語の現実の諸事実と矛盾する。」とスヴァドストは述べている。(E. P. スヴァドスト, 前掲書, p. 200)

親近関係にある言語の間でも、融合は困難であるとすれば、たとえば日本語と英語、中国語とアラビア語など言語系統の全く異なる言語の間に融合を考えることは不可能である。もっとも、日本語に対する中国語や英語の影響が強いことは事実であるが、これは言語の相互作用に属する問題である。ラテン語は、嘗てヨーロッパを席卷し、フランス、イタリア、スペイン、ポルトガルなどの諸言語を生じたが、これらの言語は、現地語とラテン語の融合の結果ではなく、本質的にはラテン語の末裔である。日本語や朝鮮語の「標準語」は各地の方言の融合の所産ではなく、それぞれその首都の言語を母体としている。(したがって、地方的には、方言と標準語という一種の二言語状態が存在していることを見落してはならない。)

諸言語の融合が困難な理由は、言語の保守的な性格による。文化程度の高い言語ほど伝統などの規範的力が強いことはよく知られている。(スヴァドストは、これを「語源的制約」と呼んでいる。)しかし、自然的融合ではなく、人為的合成ということになれば、別問題である。スヴァドストの挙げる例によれば、エストニア語では人為的に作られた数十の語根が広く普及するのに成功したとのことである。彼は、ここでも、繰返して、諸言語の「人為的合成」の可能性について、強調している。

第三にとり上げられているのは、現存の人工共通語草案の問題である。これについても、すでに若干触れたところであるが、スヴァドストの基本的立場は、従来の人工語草案は真の共通語とするには不適當であるというものである。彼によれば、資本主義下の所産である国際語草案は、すべて「個人的イニシアティブ」に基き、大部分は「西欧中心」の性格をもち、文法は原始的で語彙は貧弱であり、「国際補助語」というブルジョア・イデオロギーに仕えるもので

ある。これに対してスヴァドストは、真の共通語は、科学的研究と集団的検討に基いて作成されるべきであり、西欧のみならず広く全世界の諸言語からその資料を徴すべきであり、将来は「全人類のための単一語」となるという展望が必要であると主張する。

ただし、スヴァドストは現存共通語草案について詳細な検討をしていないので、彼の主張は説得性に欠ける。たとえば、代表的国際語案として特に一章を割いているエスペラントについて、言語的側面からの批判は全章30ページ中僅か4ページに過ぎない。その要点は、

1. エスペラントは図式的性格をもつ。(つまり構造が単純で、微細な意味合いを表現できないということであろう。)例としては、

libro de patro ((the) book of (the) father) de=of, from
を挙げ、これでは「父の所有する本」か、「父からもらった本」かの区別はできないと言う。(しかしこれは自然言語にも見出される場所である。)

2. 構造的に過度に単純であり、語彙は貧困で文法も舌足らずである。たとえば、動詞の現在形は、一般相と継続相とを区別できない。‘Li fumas’は‘He smokes’と‘He is smoking’の両様に解されると言う。(しかし、エスペラントでは、必要があればこの区別をする方法もある。e. g. Li fumas→Li estas fumanta.)

3. 一般に語尾が単調なため、聴き苦しい場合が多い。たとえば、次のような一節など、

(ĉ=[tʃ], ĝ=[dʒ], j=[j], あとはすべてローマ字読みにすればよい。アクセントは最後から二番目の音節にある。e. g. ĉiuj (チーウイ) séktoi (セクトイ))

《……ĉiuj ĝiaj opinioj kaj sektoj, partioj kaj sekcioj, kune konsiderataj kiel eroj de unu granda ĉeno……》

《……All its opinions and sects, parties and sections, considered altogether as pieces of a great chain……》

しかし、何分にもスヴァドストの例証が乏しいために、「単純，貧困，図式的」という言葉によって具体的にはエスペラントのどのような点を指摘しているのか、あまり明瞭でない。彼がここで挙げている程度のことであるならば、エスペラントの言語としての欠点を充分示したものとは言い難い。実際に用いられているエスペラントは、スヴァドストの考えているよりも、遥かに柔軟で表現力に富み、ヨーロッパ諸言語で表現できるカテゴリーはすべて表現可能であると言ってもよく、何よりもその著るしい造語能力は、どんな自然言語をもしのいでいると思う。また音声面についても、語尾の単調は、たとえば日本語のそれほどではなく、韻文などでは語末母音を省略することも認められている。むしろエスペラントは 'belsona' (euphonious) であるという人もいるから、これは個人的印象の問題とも言えるだろう。しかし、エスペラントが諸言語に対してもつ最大の特色は、それが人工言語であるために、殆ど全く規則的であるということにある。共通語としての優秀性は総合的見地からなされねばならないが、その中でも、論理的に一貫した体系、構造というものが最も重要であると考えられる。エスペラントの言語外的性格（補助語という意図、西欧中心など）についてのスヴァドストの指摘には妥当な点も多いが、言語としての性格については、彼の見解は一面的である。「多少の不備は、自然言語には許されるが、合理的に創造されるべき人工共通語には許されない」という彼の主張は、充分理解できるのであるが。

因みに、スヴァドストは、エスペラントの「内的思想」には全面的に反対である。エスペラントの創案者ザメンホフは、エスペラントの精神として独自の思想を提唱した。それは「人類主義」(homaranismo) と呼ばれるもので、平和希求と人類愛を主旨としていた。しかし、その実態は、現代の人種的紛争と国家間の対立はすべて共通の言語のないためであり、逆に共通の言語が創造されれば、それらの争いは消滅するだろうという主張である。スヴァドストによれば、これはザメンホフの「夢想」であり、「反動的イデオロギー」であり、階級調和の思想であり、社会の発展法則を無視し、「プロレタリアートを革命斗争

から引き離す」ものである。彼はエスペラントを評価して、「資本主義の所産」であり「宗教的理想主義と商業的実利主義との混合物」であるとしている。

エスペラントの支持者の中には、現在のエスペラントの比較的優勢なことと、言語としての優秀なことを考えて、事実上エスペラントを共通語の最終的草案と考え、新しい共通語の意義を否定する人々もいる。(坂井等編、前掲書) スヴァドストはこれに対して、

「多少の実用性は考慮に足らず」、「言語の質だけがすべてを決定する」として、

「しかし、このエスペラントの優勢が、近い数十年間には著るしく成長するとしても、一般に容認する値打のある言語が現われるときには、その意義を失なう。」

と述べている。(E. P. スヴァドスト、前掲書、p. 147)

国際共通語論の観点からは、私はスヴァドストの見解は正しいと思う。エスペラントの立場からは、国際共通語論 *interlingvistiko* というとエスペラントを中心とする研究と同じ意味にとられ勝ちである。しかし、私の考える国際共通語論 *interlinguistics* はエスペラントをも含めて広く合理的な共通語の創造と普及という問題を対象とするものである。その共通語は、全く新しい草案でもあり得るし、場合によってはエスペラントやその改良案である可能性も存在する。要するに、問題はまだ最終的に結着していないのである。スヴァドストがエスペラントの外的性格を主として批判して、その言語としての長所や実用性についてあまり注意を払っていないのは残念である。

最後に、全く新しい人工語の作成という問題がある。スヴァドストの主張の重点もまさにここに存在する。すでに度々言及した彼の見解の要点は、彼の本の編集者序言によれば、次の通りである。

「彼(スヴァドスト)の主張は、全人類の言語は、現存諸言語の発展の結果としてではなく、その諸言語と並んで、しかるべき理論に照らして、広汎な国

際的規模で組織された、集团的、大衆的、科学的な言語創造活動の結果として、生じ得るということである」(E. P. スヴァドスト, 前掲書, p. 3)

その「共通語」は、ヨーロッパ諸語のみならず広く全世界の諸言語の粋を集めたものであり、「補助的、副次的言語として出発し、長い歴史的過程で次第に新しい人類の基本的言語になり、最後には唯一の全人類の言語に成長し得るものである。」(E. P. スヴァドスト, 前掲書, p. 3) (傍線は私による)

スヴァドストは、ここで、どのようにして共通語が成立し、どのような過程を経て単一語に到達するかについて述べている。彼の挙げる共通語の第一段階(補助語)は、現在でもエスペラントなどによって部分的に具体化されている。しかし、現状はエスペラントだけが補助語として全面的に用いられているわけではないので、純粋な意味での二言語状態は未だ存在しない。補助語的機能を果している言語は、英、仏、西、露などがあり、地域によって多様である。いわば複数の二言語状態が見られるのである。これに対してスヴァドストの考える共通語の第二段階(「基本語」)は、いわば単数の二言語状態であるが、これは全く推測の域を出ない問題である。したがって、その先の段階である「単一語」については、今のところその当否を論議する時期ではないと思う。スヴァドスト自身も共通語について何ら具体的な構想を示していない。

しかし、スヴァドストがザメンホフを「夢想家」として批判しながらも、彼の言語的才能と献身の人類愛には敬意を表しているように、われわれも、全人類がただひとつの言語を語る日の到来を確信し待望するスヴァドストの情熱的理想主義に対しては、無関心であるわけにはいかない。この点について、彼は次のように述べている。

「もしも共通語の意味がますます増大し、それが、単一の全世界的無階級社会のすべての成員の二つの母語のひとつとなり、また進化の道程で過去に生じた諸言語よりも遥かに豊かで、柔軟で、音調のよいものとなれば、われわれの子孫が、日常交流の中で、家庭で、家族の中で、仕事で、共通語をますます話すようになるであろう。このような言語こそ、何人にとっても、未知の外国語

ではなく、すべての人々にとって近しい母語となり、全人類の財産となり、そこでは普遍的平和と普遍的友好とが永遠に実現するのである。」(E. P. スヴァドスト, 前掲書, p. 255)

この節のつけ足りとして、「人工語」の「人工」という意味について、検討してみたい。イエスペルセンは、前出の論文の冒頭で、「人工国際補助言語」の「人工」artificial という言葉が、「不自然」「作為的」などという語感もあるために、誤解を避けようとして、‘constructed’ という単語を使ってはどうかと言っている。スヴァドストも同様の意見である。彼によれば、「人工的」とは「人間の叡智によって創造された」という意味であり、広義では、言語そのものがすでに「人工的」なのである。そこで彼は、この「人工」の度合に従って、自然言語も人工言語も併せて位置づけする考えを示している。それは次のようなものである。(E. P. スヴァドスト, 前掲書, p. 219) (LAとは ling-art の略号で人工度を示す。)

LA-1 (人工度第一段階の言語) 文字のない言語, または規範化されていない言語。

LA-2 (人工度第二段階の言語) 規範化された言語, たとえば国語または標準語。

LA-3 (人工度第三段階の言語) アポステリオリな人工国際共通語, エスペラントなどのように, 既存の自然言語に基いた人工語。

LA-4 (人工度第四段階の言語) アプリオリな人工国際共通語, 既存の自然言語に基かない人工語, たとえば, P=気体, E=運動, O=停止を表わすと定めると, PE=風, PO=凧ぎということになる。

この他LA-5として, コード化された言語が考えられるが(電算機の言語など), これは実際の言語生活では使用不可能である。LA-1は狭義で自然的, LA-2は半自然的, LA-3は半人工的, LA-4は狭義で人工的, LA-5は超人工的と呼ぶこともできる。スヴァドストによれば, LA-1からLA-2への移行は, 大衆による無意識的創造から, 個人による意識的創造への変化であ

り、組織的「言語建設」の始まりとも言える。この場合、言語への人為的干渉が重要であるとされる。スヴァドストの考える共通語は LA-3 のタイプのものである。それが LA-4 になるかも知れないが、その見通しは今のところ立ち難いとしている。

スヴァドストの図式は興味深いものであるが、やはり異質のものが無差別に羅列されているという感じがする。というのは、LA-2 と LA-3 との間の相違は言語としては質的なものであり、LA-1 と LA-2、LA-3 と LA-4 との間の相違は程度の問題であるからである。しかし、本来単一語となるべき人工語を考えているスヴァドストにとっては、その人工語が実は自然言語と本質的に同じであるということを示すためには、このような統一的図式が必要であったことは理解できるのである。

さて、現存の諸言語から共通語を「科学的に合成」する場合に、語彙の選択の基準が重要となってくるが、スヴァドストはこれについては、語源的、人種的、地域的配慮のほか、「自国の領域以外へのその言語の普及度」「その言語の語彙が他の諸言語に採用されている程度」「比較言語学的方法によって評価したその言語の価値」「その言語の世界文明の進歩（世界革命）への貢献度」などを挙げている。（E. P. スヴァドスト、前掲書、p. 233）

これを見ると、結局スヴァドストの「共通語」は、事実上は現存有力諸言語から大部分の語彙を取り入れることになり、原則的にはエスペラントなどの語彙構成とあまり変わらないことになる。僅かに「世界革命への貢献度」という点について、ロシア語や、多分中国語など社会主義圏の諸言語が、かなり採用される可能性が残されている。しかし、一般に国際共通語論の立場から見ると、この基準は妥当でないと思う。それは、言語外的要因の過大視であり、スヴァドストがエスペラントを評して「普及度よりも言語そのものの質が問題」と言った自説にも矛盾するからである。

また、異質の諸言語からとり入れた語彙が同質的な homogeneous 「共通語」を容易に形成するとは考えられない。これについてスヴァドストは、言語の

「有機的綜合」という考えを提唱している。たとえば自然言語の借用語の中には、外来語という意識の残っているものもあるが、中には音韻的にも文法的にもその言語に完全に同化して、外来語という意識のなくなったものがある。これが「有機的綜合」であって、新しい共通語もこの原理によって成立するとされるのである。(E. P. スヴァドスト, 前掲書, p. 233) 私は、この説にも直ちには賛成し難い。というのは、自然言語における「有機的綜合」の場合には、綜合の母体となるべき基本的言語があらかじめ存在し、これが外来語を自己の内に摂取同化するという形となる。これに対して、新たに創出されるべき「共通語」は、その基本的性格すらも確定されていない。「西欧中心」*occidentalism* というエスペラントなどの性格は、この点ではむしろプラスに働いている。スヴァドストのように「全世界の諸民族語」を共通語作成の対象とするときは、そのどの部分がどの部分に同化するのか、または同化されるのか、主客の関係が明瞭でない。諸言語が平等に影響し合っひとつの有機的綜合をなすという考え方は、「諸言語の融合」を論じた個所で、スヴァドストが自ら否定しているところである。

とすれば、実際問題としては、新しい共通語は、やはり特定の言語または言語族の構造を母体として(たとえば、印欧語、アルタイ語、シナ語、セム語など)、これにその他の言語の特色をできるだけ加味するという形に落ち着かざるを得ないと思う。

V む す び

この論文を書き進めながら、私は、国際共通語論 *interlinguistics* というのは、学問研究というよりも、政治的、思想的要因が介入する余地が多くある分野だという気がしてならなかった。それは言語学の一部門であるよりも、むしろ言語政策 (*Sprachpolitik* または *Weltsprachpolitik*) の一環という位置づけが適当と考える。特にスヴァドストの共通語論はそうである。

それは、根本的には、冒頭で述べたように、研究の対象が未確定であるということに由る。(もっとも、エスペラントなどを国際共通語と定める立場では、

エスペラントを中心とする「研究」が国際共通語論となるであろうが。interlingvistiko=Esperantologio)

また、実際的には、国際共通語論は「研究」プロパーにはなり得ないという宿命がある。どんなに優秀な人工語でも、自然言語のように最初からそれを母国語とする民族は存在しないから、「普及」とう問題が何よりも重要となってくる。エスペラントがもろもろの人工語草案の中で生残ったのは、ザメンホフの遺訓を忠実に守って、みだりに「改良」を加えなかったからである。これに対し、エスペラントの改良案であるイドなどは、言語としてはより合理的であったかも知れないが、頻繁な改良案が普及を阻害し、遂にはイド支持者の内部分裂を生じて、国際語としての生命を失ってしまったのである。

私は、結局スヴァドストの共通語論に関して次のような態度をとるものである。

1. 共通語の必要を指摘している点には賛成する。
2. その具体的な提案には批判的である。特に世界革命を前提とする単一語論は同意し難く、それよりも国際補助語という考えの方が、より現実的であると思う。(しかし、一般に将来の単一語というアイデアを全面的に否定するものではない。)
3. 彼自身の共通語の実際の草案を、部分的にさえも例示していないのは不満である。

またエスペラントについては、次のように考える。

1. 西欧中心的性格である。
2. 人工語として完全ではない。(語の一義性が不徹底、例外事項がないわけではない、語の構成原理に問題がある、つまり派生関係の過度の利用は語の個別化と概念の明確化という近代語の傾向に逆行する(泉井久之助「言語の構造」p. 94)、など。)
3. 「補助語」としては適当である。(実用性が高く、普及度が比較的大き

い。)

更に、新しい共通語案の作成という点については、概してその可能性を認めながらも、それは極めて困難な問題であると考えざるを得ない。スヴァドストのいうように自然言語に基いて、中立的な人工語を作ろうとしても、現存諸言語の構造の相違が非常に大きいので、その「総合」は決して容易ではない。語順ということひとつをとってみても、ふつう日本語では動詞は文末にくるが、アラビア語では文頭に、英語では主語の後に現われる。印欧語では、格変化や前置詞によって表示する観念を、ウラル・アルタイ語では後置詞や助詞によって表現する。印欧語で重要な性、数というカテゴリーは、日本語やマライ語には本来存在しない。トルコ語で活潑な母音調和や朝鮮語の音便現象や中国語などの音調は、印欧語には欠如している。……これら無数の、しかも本質的な相違点の中から、適当な要素を選択して「人工的に合成」するのは、至難の業であり、少くとも、少数の人々の手によって、比較的短期間に成し遂げられる見込みは全くないと言ってもよいであろう。

しかし、とにかく、われわれは共通語を必要としているのである。これは「緊急の課題」であると言われている。それならば、今、何をなしたらよいのであろうか。スヴァドストは、早急に「国際共通語研究所」を設置して、この問題の現実的検討を開始すべきであると主張する。この研究所の任務は、1. 従来 of 国際語草案の研究と実際的応用、2. 機械翻訳など言語学の新しい分野の研究であり、その目的は、国際共通語論の全容を明らかにして、これについての専門家を養成し、国際的討議を行なうことにあると言う。

これは、スヴァドストの本の中では、殆ど唯一の具体的提案である。しかし、これによって実際の共通語草案が直ちに作成されることは期待できない。きわめて長期に亘る研究、検討、実験が必要である。それでは、現在の「多言語状態」はどうなるのか。さしあたって有効な解決策が存在しないとして、「言語的帝国主義」の現状を放置すべきであらうか。

私は、そのような現実閑却の「未来待望論」には反対である。目前の国際交

流の手段としては、やはり何らかの共通語案を推進しなければならないと思う。エスペラントが完全な言語ではないにしても、それに替るべきものが結局存在しないとするならば (*faute de mieux*)、エスペラントを敢えてこの「補助語」にしてもよい。しかし、それは、エスペラントを補助語として最終的に承認せよとか、いわんやエスペラントを将来の人類の言語にすべきであるとかいう議論とは、別問題である。

私がエスペラントの使用(または試用)を主張するには、もう一つの理由がある。それは、エスペラントの推進が、一般に国際語思想の普及と、その実践の成果の蓄積に大いに役立つということである。したがって理論的にはエスペラントでなくてもよい。またエスペラントであってもよい。とにかく、そういう「国際語体験」が必要だということである。

私個人に関して言えば、私はエスペラントを十分に習得しているとは思わない。しかしそのような不十分な語学力をもってしても、国内、国外の多数の人々との文通を行なっているし、日本人をも含めて多様な国籍の人々と長時間に亘って歓談や議論をした経験もある。体験的事実としては、私にとってエスペラントは、英語の次ぎに身近かな言語であり、フランス語やロシア語よりもずっと使い易い。この「国際語体験」は、非英米人と前述の「イングラント」を用いて意志の交流に成功した場合にも、部分的には味わい得るであろうが、本来無国籍、中立のエスペラントによるときは、それがもっと純粋な形で感得されるのである。

たとえ完璧とは言えないエスペラントによるものであろうとも、国際語思想の普及と国際語体験の蓄積は、当面の問題としては、深刻な「多言語状態」を部分的にも緩和し、また長期に亘っては、未来の人類の言語問題にも積極的な展望を開くものである。エスペラントによって培われた、国際共通語についての知識と経験とは、仮りに将来もっと合理的な共通語草案が一般の承認を得るようになる時にも、決して無駄とはならず、新しい草案の普及と発展に大きな役割を演ずるであろう。

最後に国際共通語論の可能性について、簡単に言及したい。エスペラントを中心とする国際共通語論 *interlingvistiko* に対し、広い意味での国際共通語論 *interlinguistics* は、前述のように共通語草案の作成を目的としているため言語政策的性格が強いが、その目的のためには、諸言語の研究が基礎となる。

言い換えれば、国際共通語論とは、言語学の言語事実の記述と法則設定の成果の上に、はじめて成立するのである。したがって、言語政策の分野に属するとは言っても、実は高度の理論的水準を要求されるのであり、いわば現代言語学の諸部門を総括する総合科学的な色彩もそなえている。国際共通語論に関心をもつ人々の多くが、人類の「少数言語状態」や「単一言語状態」の実現に努力している反面、彼等自身は多くの言語を理解するポリグロットであるのは、面白い現象である。

以上がスヴァドストの共通語論の趣旨と、私の見解である。国際共通語に対しては、否定論者や懐疑論者も多いが、それが現在と将来の人類にとって真剣な要請となっていることを考えると、どのような立場からであるにせよ、この問題は一考に値するものである。少くとも「補助語」という意味では、共通語は現在かなり具体性のある問題となっている。

Interlinguistics が今後ますます注目されるであろうことは、疑いの余地がないと考える。(1971年1月)

参 考 文 献

- I. П. Свадост-Истомин, Как возникнет всеобщий язык, 1968, Издательство «НАУКА», Москва,
И. В. Сталин, Марксизм и вопросы языкознания, 1952, ГОСПОЛИТИЗДАТ, Москва.
The Soviet Linguistic Controversy, translated from the Soviet Press by J. V. Murra, R. M. Hankin, and F. Holling, 1951, King's Crown Press, New York.
O. Jespersen, *An International Language*, 1928 (*Selected Writings of Otto Jespersen*, 1961, Senjo Publishing Co. Ltd., Tokyo).
Paroladoj de D-ro L. L. Zamenhof, 1966², Japana Esperantista Librokooperativo,

Osaka.

坂井松太郎, 福田正男, 加藤孝一編「エスペラント便覧」1967年, 要文社, 東京.

エドモン・プリヴァー, 梅棹忠夫・藤本達生訳「ザメンホフの生涯」, 「世界の人間像16」
に収録, 1965年, 角川書店, 東京.

中野好夫・小田実「(対談) 英語教育観さまざま」, 「図書」1970年11月号, 岩波書店, 東京.

泉井久之助「言語の構造」, 1967年, 紀伊国屋書店, 東京.